

アクティブラーニングを促すための教育的介入における  
コラボレーションの効果について  
—— メディア・リテラシーにおける振り返りシートより ——

A study examining the effect of educational intervention in facilitating active learning through collaboration  
-Student's retrospective sheet in the Media Literacy-

丸山 宏昌	小町谷 圭
高橋 肇	高田由利子
MARUYAMA Kousuke	KOMACHIYA Kei
TAKAHASHI Hajime	TAKADA Yuriko

This study explored how educational intervention can facilitate active learning as the first year education. Through collaboration in a mixed group of music, art, sociology in media literacy, it examined what kind of educational interventions promoted active learning. It is necessary to mastery the basic knowledge and techniques of group work and to have them discuss themselves as necessary for functioning and enriching learning by collaboration. For recognizing how and what students learned through collaborations, they asked describe retrospective sheets every time. For the analysis, the third and ninth sheets were extracted, and seven categories were generated such “about group members”, “learning through group work”, “acquiring new learning way for experiencing presentation” etc. Further study is needed to examine whether such educational interventions are effective in active learning through collaboration.

## 1. はじめに

昨今、学生の主体性を引き起こす為に、学生同士がコラボレーションするワークが講義系授業においても導入されている。ここでいうコラボレーションとは「分野や立場が違う複数人の創発によって行われる協働作業やその成果」の意味である。中央教育審議会(2017)における「今

後の高等教育の将来像の提示に向けた論点整理」に拠ると「各大学等の中で多様な教育研究を実現するため、時代の変化に応じ、従来の学部・学科等の枠を超えて、迅速かつ柔軟なプログラム編成ができるようにする」ことが大学に求められている。つまり、多様な価値観をもつ学生同士のコラボレーションによる学びから、新たな価値を創造する場が必要であると解釈できる。授業においては、従来の方法が踏襲されてきた教員による一方向的な知識伝達型から、学生の主体性が促進されるような参加型授業が増加している。具体的には、学生同士のコラボレーションを通して認知的、倫理的、協働的能力を引き出し鍛えるような双方向のグループワークを中心とした授業である。コラボレーションがもたらす成果としては、個人を超えた付加価値の生成が注目を集めることが多いが、実は、その「アウトプット」だけが成果なのではない。そのコラボレーションに参加したメンバーが、その過程で「学び」を得るという点も、重要な成果だということができる（井庭 2009）。

本稿での着眼点は、アクティブラーニングの一環としてコラボレーションによる学びを促す参加型授業であり、その実践報告である。コラボレーションによる学びを機能し充実させるためには、学生にグループワークに必要な基礎的技術を伝え、経験を積ませることが必要であると思われる。その上で、参加型授業でどのようなコラボレーションを生み、実際の過程で起きる葛藤や形成プロセスについて述べ、アクティブラーニングとしてどのように繋がったのかを考察する。

## 2. 授業の方法

### 2.1 授業の概要

本稿で取り上げる事例は、筆者が札幌大谷大学で開講している「メディア・リテラシー」授業である。1年次の学生が履修し3学科（音楽学科、美術学科、地域社会学科）で開講される前期必修の科目となる。授

業の概要は『新聞、電話、ラジオ、テレビ、インターネットなど、情報を媒介するメディアが次々に誕生し、対象の理解や社会の輪郭に大きな影響を与えてきました。鏡を見る様に自己や他者の認識に役立つ一方で、バイアスや格差をもたらすメディアの「コミュニケーションを仲立ちする」という機能について、それぞれの特性や素性を理解した上で、適切な手段で読み解き、自信の考えを伝えるための技能と批評的、創造的な完成を身に付けます』となる。到達目標として以下の3つを掲げている。

①メディアについて基本概念を理解できる。②メディアを使いこなし、情報の受け手のみならず、情報発信に必要な技能の基礎を身につけられる。③新たな時代の要請に答える担い手としての意識を持ち、自身の活動にメディアを活用できる。次にシラバスに基づいた授業内容を以下に示す。

表 1. メディア・リテラシー 授業内容

授業項目	授業内容
1回：メディア・リテラシーとは？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜメディアリテラシーが必要か</li> <li>・学内情報共有について</li> </ul>
2回：情報機器の扱い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学内情報ポータルサイト</li> <li>・メールリストの使い方</li> </ul>
3回：ネットワークの仕組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学内サイト：Wikiの使い方</li> <li>・旧式ネットワークと新しいネットワーク</li> </ul>
4回：情報倫理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報倫理とは</li> <li>・ソーシャルメディアにおける情報倫理</li> </ul>
5回：情報収集	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報収集の3つの眼</li> <li>・聴くスキル、要約スキル</li> </ul>
6回：コミュニケーションツールと情報管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・拡散思考と収束思考</li> <li>・グーグルドライブの使い方</li> </ul>

7回：情報整理	・おでかけプランを作る
8回：メディアとは何か	・メディアとは何か
9回：まとめ	・情報の出し手としてプラン発表 ・情報の“受け手”として投票

## 2.2 コラボレーションによる学びを機能させる仕掛け

コラボレーションによる学びを機能させ学生の主体性を引き出すために、授業はグループワークで行う。少人数のグループ活動によって能動的な参加の機会を持たすことができる。各回の授業でグループワークの基礎的技術を伝え、コミュニケーションを学ぶ機会を持った。授業で実践した、学びを機能させる仕掛けを紹介する。

### 2.2.1 グループワークの導入

3回目講義で3学科グループの初顔合わせの機会を持った。はじめの瞬間は緊張するものだ。緊張は学習の疎外要因となる。のちの人間関係に大きな影響を与える時間だ。自己紹介の際に、「4つのコーナー」で強みを表現する問いを用いて、のちのコラボレーションで発揮する能力要素の自己開示を促した。

①学科 名前	②自分の人見知り度 (0~100%) &ひと言
③私が好きな 北海道の 「スポット」「食」	④自分の得意 なこと1つ

図1 自己紹介シート「4つのシート」

①学科、名前②自分の人見知り度(0~100%)&ひと言③私が好きな北海道のスポット・食④自分の得意なこと1つ。

### 2.2.2 意見の合わないときのコミュニケーション

グループワークでの意見交換では意見の違いが起こる。他者とよりよい人間関係を築きコラボレーションを生むには合意形成が欠かせない。

多様な意見の交換の中でよりよい結論を導くことが大切だ。合意形成は各メンバーにとっては必ずしも最良の案ではなくともメンバー全員が支持できる案をグループ全体で創り出していくことだ。だが合意を形成しようとする意見や意識の違いから対立、葛藤、衝突が生まれる。対立は人間関係を悪化させるため避けようとする傾向があるが、良い合意形成には対立は欠かせない。大事なことは賛成意見も反対意見も考えて両方の意見を比べてみることにし、そして各人が納得することが大切である。意見の食い違いは様々なところに現れる。目的や役割、時間などの違いがあった時には違いを明確にし、なぜそう考えるかという背景に目を向けることが大切である。

3 回目講義ではグループのメンバー全員に共通する項目を出来るだけ沢山挙げグループで競った。共通点探しのポイントは概念を上にあげることだ。対立が起きたときには概念を上にあげて合意形成をはかること、違いに目を向け互いが何を求めているかを知ること、そのために時間をかけて話し合うことを確認した。共通点からグループ名を決めた。

### 2.2.3 傾聴によるコミュニケーション

お互いの力を高めあうコラボレーションでは相手の話を「聴く」ことが重要だ。受信と発信がそろって双方向で行われることでコミュニケーションは成立する。聞き手がいるからといって必ずしもコミュニケーションが成立するというわけではない。双方向のやりとりの中で良い対話を実現するためには「話すこと」ではなく「聴くこと」に目を向ける事が必要だ。

#### 『聴くスキル』5つのポイント

1. 相槌、うなづき
2. 繰り返しをする(事実・感情・要約)
3. 最後まで聴く
4. 言葉以外に気を付ける
5. 好奇心を持って相手のために聴く

図2 傾聴のポイント

3 回目講義ではグループワークでは、実際に「聞く」と「聴く」の違いを体験し傾聴の重要性を伝えた。ペアになり「聞く」側は相手に顔を向けず、うなづかない、相槌を打たない。話す側は 30 秒話してもらい、話した後、気持ちを伝える。その後、3 人で「聴く」体験をした。『聴くスキル』の 5 つのポイントを提示し実践した。体験からきちんと聴く（傾聴）の重要性を体験した。

### 2.2.4 話し合いの技法

学びの場において話し合いによる学びが効果的である。だが学生同士の話し合いを促進させることは容易なことではない。そこで話し合いのための実践的技法を導入し実践する。

6 回目講義では「発散思考」と「収束思考」の考え方を紹介し代表的な手法である 2 つの方法「ブレインストーミング」「マトリックス」を体験的に理解する演習を行った。発散思考とは一切の判断を保留してとにかくアイデアをたくさん出していく思考方法である。それに対して収束思考は発散されたアイデアを絞り込んでいく思考方法のことだ。発散と収束

は意識的に時間的に明確に分けて思考することが重要である。人間の頭は発散と収束を同時にはできない。良いアイデアがないか良い解決策がないかと考え始めては思考が止まってしまう。発散と収束を同時に行

発散思考	分ける	収束思考
<ul style="list-style-type: none"> <li>・マシガン的思考</li> <li>・多くのひらめき</li> <li>・ヒント</li> <li>・きっかけ</li> <li>・糸口</li> <li>・解決の芽</li> <li>・自由奔放なアイデア</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・最良案へ絞る</li> <li>・評価判断</li> <li>・煮詰める</li> <li>・仕上げる</li> <li>・具体案</li> <li>・解決策</li> <li>・企画案</li> </ul>

図 3 発散思考と収束思考を分ける

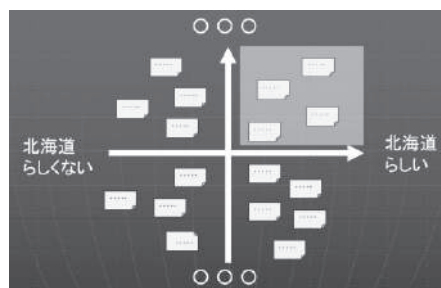


図 4 収束技法：マトリックス

おうとするからである。多様な考えをコラボレーションにつなげアイデアを生み出すにはまずはアイデアのもとである体験や知識、情報、イメージを大量かつ効果的に取り出すことが必要だ。山ほど出されたアイデアを分類し絞り込んでいく過程で、アイデアが練られ質の向上が図られ、コラボレーションからのアウトプットにつながる。

### **2.2.5 見える化・可視化**

話し合いを効果的、効率的に進めるためには、話の内容や発言を目に見えるようにし、記録化・図式化・構造化を行う。これを「見える化」という。話し合いが難しいのは議論そのものが目に見えないからである。頭の上を飛び交っている状態では、良い議論はできない。話の内容を地上に落とし込み話し合いを効果的、効率的に進めるための方法が見える化だ。7 回目講義では付箋や紙を使用し見える化を行いながらグループワークを行った。

## **3. 教育効果について**

### **3.1 振り返りシートの実施**

講義内容への理解度、興味や関心度、難易度などを科目担当教員が把握するため、振り返りシートを講義終了時に実施し（初回と2回目はオリエンテーション時で実施せず）、回収箱での回収を行なった。シートは、3つの質問項目（分かったこと、分からなかったこと、コメント）に分かれており自由記述であった。また、出席確認として氏名の記入を求めている為、回収率は毎時100%だった。

### **3.2 振り返りシートの分析**

振り返りシートの記述内容について、学科間での相違はほぼ見られなかった。主な内容としては、講義内容の要約やインターネットの操作方

法についての質問，または教員に向けた質問など個人内でのこと，一方で，グループメンバーやグループワークなど，他者との相互関係に触れた内容の二極化が見られた。本報告書では，アクティブラーニングとしてのグループワークに焦点化されている事由から，個人内のデータは分析対象とせず，グループについてのデータ，主に，グループメンバーについての印象やグループワークを通して感じた事などのデータを分析対象とする。さらに，学科横断におけるグループワークが，どのようなコラボレーションを生み，それがアクティブラーニングとしての成果にどのように繋がったのか考察したい。

### 3.3 結果と考察

初回と2回目はオリエンテーション中の講義であり，各学科が各コンピューター教室に分かれての実施だったこともあり，振り返りシートを実施していない。そこで，全学部の学生が初めて一同に会した3回目と最終回（9回目）のデータを取り上げ，グループメンバーの印象やワークを通して得た体験についてまとめていくこととする。グループ編成については，あらかじめ担当教員によって，3人から4人を目安にグループ分けされた。

抽出したデータはカテゴリー分けをし，その後，データの特徴を明確にするために各カテゴリーにテーマをつけた。7つのテーマが浮上した。詳細は以下の通りである。1. グループメンバーについて，2. グループメンバーとしての抱負，3. グループワークを通して気づいた事，4. グループワークにおける新たな学び，5. グループワークを通して感じた事，6. グループワークを通して学んだこと，7. プレゼンテーションを体験したことへの気づきである。なお，個人情報保護の観点から，本報告書に掲載されているデータにおいて，個人名やグループ名などの個人が特定される言語表現については修正をした。また，学生の記述し



た内容には、誤字や脱字も見られるが、学生のリテラシーの現状をありのままに報告する意図に拠り、記述された内容はそのまま反映した。

① 3回目

グループメンバーについて

- ○○さん：寝る事、札幌一人暮らし ○○さん：折り紙が好き、札幌
- 案外話しやすい人達とグループになったこと
- みんな人見知り
- 人脈を他学科に広げるのが案外面白そう。
- グループの人たちの得意な事や共通点がわかった。
- 違う学科でも同じ意見がけっこうあったり、共通点も多く、楽しそうな人が集まったということが分かってよかった。
- まずメンバーの人が優しい人で良かったです。
- ちがう学科の人たちと話すことがなかったのでめちゃくちゃきんちょうしたし全然話せなかった。
- 色々な学科の方との交流が楽しかったです。共通ネタなど初対面なので難しかったのですがみつけるのも楽しかったです。
- 芸術学部と社会学部の人たちとグループになって活動できたのでよかった。
- 良いグループで、たのしくしっかりグループワークに取り組みそうので安心した。

40名以上の学生が他学科の学生について記述しており、ほとんどの学生は、異なる学科のメンバーに対して肯定的な感情をもっていた。「メディア・リテラシー」の授業の中で友人が出来たことへの安心感について述べている学生や、グループメンバー同士の特徴を捉え、あえて“○○さん”など個人名を挙げて記述する学生も見られるなど、

対人認知としての印象形成も見られた。グループメンバーへの関心や意識が生まれた要因として、黒木(2002)が、グループ形成期は相互の興味や関心の類似性を見つけることでグループ感情が芽生えてくると示唆するように、まずはグループメンバーの一員として、仲間を観察し合い、共通点が見つかることで肯定的な感情を重ねていくことで、心理的に程よい距離感を生み出していったと思われる。また、一つのグループが3名から4名から成る少人数な構成は、自分が場を引っ張らなくても、つまりリスクを取らなくてもよく、また、誰かが積極的になることで、グループは活性化されていくため、居づらい思いが生じにくいことも大切な要素であったと推察される。

#### グループメンバーとしての抱負

- 初めて4人で顔合わせをして1人1人とても素敵な人でとてもよかった。仲良く頑張っていきたいと思った。
- 他学科と交流することに不安を感じていましたが、同性ということもあって、これから半年仲良くやっていけそうだと感じました。
- これからもっとコミュニケーションとりたいと思います。
- 次の授業から、同じグループの人ともっと仲良くなって、課題に取り組めたらいいなと思います。
- これからグループで楽しくがんばっていきたいと思いました。
- この授業を通じてもっと色々な人とかかわりたい。グループだけでなく、周りの人とふれあう機会がほしいと思った！！
- チームとしてがんばりたいです。

振り返りシートにはグループメンバーに対する印象だけでなく、グループに対する抱負や期待などについても触れられていた。これらの期待感が生じた要因としては、グループワークとして取り組んだ、自

己紹介としての自己開示，あるいは他者の話を傾聴するなど，相互のインタラクションが促進されたことも影響していると思われる。また，“他学部他学科との合同授業”は，正課としては唯一のため，新鮮な気持ちも促進されたのかもしれない。

#### グループワークを通して気づいた事

- グループ内で話し合うことで気づけない事に気づけた
- 話し合うことは大切
- 意外と共通点が多くておどろきました。
- コミュカ（注：コミュニケーション能力）が低いとか高いとか関係なかった。
- 同じ学科だと考えることが似てくると思うが，他学科だと考えていることがだいぶ違った。
- 人見知りではあったが，自分の考え・思いなどを自分から積極的に発言することで話しのたねがどんどん広がっていくことをすごく実感した。

教員から発信されたグループ課題には，ブレインストーミングを通じた思考力や発想力の生成，また，制限時間を設定し発現したアイデアの数を競わせるといった介入により，グループメンバー間の団結力がおのずと生まれるような工夫がされていた。メンバー間のグループへの凝集性が短時間で高められたことも学生のコメントから鑑みられる。

#### グループワークにおける新たな学び

- 協力することで新しい発想が生まれること。
- 人は1人1人違う考えをもっているということがわかった。他人と

話す事は自分にとって刺激になるので良いなと思った。

- 発想力は人数が多い方が良い。
- 複数人で話し合うと色々な考えや意見が出ておもしろいということがわかりました。
- それぞれの学科の発想力を合わせると大きい。他者と共有すること
- 他人と共有することに意味がある。色々な知識などを知ることができる。

先ほども述べたが、グループ課題に対する学生たちの理解や捉え方は様々であったが、「発想力を合わせること」の大切さについて触れた意見や「他人と話す事で得られること」の重要性など、グループワークを経験したことで、グループを円滑に機能させるための具体的な方法に触れた意見も多く見られた。グループワークの効果としては、グループメンバーとよりよいコミュニケーションを図ることでグループワークに取り組むモチベーションの促進力も向上されることが推察される。

## ② 9回目（最終回）

各グループでの課題発表として、持ち時間30秒でのプレゼンテーションを実施した。発表方法や評価などについては、事前に担当教員から説明があり、準備の為に2週間の期間が設けられた。

### グループワークを通して感じたこと

- 班の人と協力して1つの事に取りくむのが大変だったけど、楽しいということ
- 数人で一つの何かを作るのは大変でも楽しく感じがした。
- 他学科の人と話す機会ってあまりないのでメディアリテラシーのように3学科合同で共通の課題をこなすのはとてもいい体験にな

りました。

- ▶ 他学科の方々と色々な意見交換や交流が出来てとても良い経験が出来ました。

3 回目のコメントと比較すると“大変だったが、楽しかった”という記述が多かった。課題を成功させるためにはメンバー一人一人の役割責任も生じ、また、異なる時間割をもつ他学科の学生同士と円滑に作業を進めるためには、face to face に拠らないコミュニケーションの取り方においても工夫が必要だったかもしれない。しかし、肯定的なコメントが多かったのは、グループワークを通して何かしらの達成感を得ていると推察されるだろう。

#### グループワークを通して学んだこと

- ▶ グループというものが複数並ぶことにより、個性がより極立つと感じました。今後、このような機会を得た経験を社会で生かせたいと思いました。
- ▶ グループだからできる情報収集力がすごいと思った。
- ▶ グループワークを通して、もっと協調性を持ちたいと思います。
- ▶ グループで力を合わせて何かをする事の大切さが分かりました。
- ▶ 人がたくさん集まるとその数だけアイデアが生まれるということを実感しました。
- ▶ メディアリテラシーを通していろいろな視点から考えることの大切さを学ぶことができました。

グループワークにおける学びとして、「協調性」、「視野の拡充」、「社会への応用」、「チームワークに対する価値観」など、学生はグループワークを通して思い思いにコメントしていた。

### プレゼンテーションを体験したことへの気づき

- 上手く役割分担をする事で素晴らしい発表をする事ができました。
- 他のグループの発表が自分たちより優れているものが多くあり、発表の点でも多くの事を学べた。
- 他学科とかが集まれば良いものが作れる。発表するのは大変。
- みんなに発表して伝えることの難しさを知った。
- どれだけ良い内容でも紹介の仕方であらうとわかった。
- グループがしっかりしている所は案もほうふで発表もすばらしかったです。
- プレゼンする時に聞いている側に問いかけるような心がけをしているなあと思った。
- インパクトや人をひきつける内容をプレゼンするのが大切なことだと思いました。

自分達のグループについては反省点が目立ち、一方、他者のグループについては賞賛するコメントが目立った。今回の課題は、北海道のおすすめスポットを収集し、おでかけプランを制作し、ウェブに掲載すること、そして、成果として発表するといった2つの異なるアウトプットが必要とされたが、30秒における効果的な発表の仕方については十分に学習されていなかったと思われる。ただ、他のグループに対して積極的に評価する態度は見られていることから、グループワークを通して他者を評価する意識が生じたとも言えるだろう。

### グループメンバーについて

- 最初から最後まで心地の良いグループでこのグループで良かった

です。

- 普段関わりのない人と意思疎通するのは難しいなと知りました。
- メディアリテラシー最後の授業を終えて、改めてこの班で良かったと思いました。楽しかったです！！
- 唯一他学科との交流ができる授業だったので印象深い授業だったと思います。
- 他学科の友達ができて良かった。他の学部の人とも協力してできたからメンバーに感謝したい。
- 他学科と交流できるこのメディア・リテラシーの授業は交友を広げることができるのでとても良い授業だった
- 3学科で何かできる機会があればまたやってみたい。
- この授業で他学科の人と交流でき、皆でちゃんと話し合いながら課題に取り組めたのでとてもよかったです。
- 3つの学科でグループをつくって交流するという、授業内以外ではなかなかない機会を頂くことができ、様々なことを学ぶことができました。

3回目と同様に、グループメンバーについてのコメントが多く見られ、この回でも同じ数のコメントがあった。内容を比較すると、最終回の方が、グループメンバーへの感謝の気持ちや、グループワークをすることの利点、そして今後の期待について具体的に触れている記述が目立った。

#### 4. 総合考察

シラバスにも示されているように、本講義の到達課題は、メディアの知識やスキルの修得に向け、個人レベルではなく、他者との相互関係を通したコラボレーションを積み重ねることで修得していくことであった。また、コラボレーションについてのコメントは、本研究の対象外であっ

た4回目から8回目の振り返りシートにも見られた。つまり、毎時、グループワークにおけるコラボレーションを通し、履修生は何等かの気づきや発見があったと推察されるだろう。Brown(1992)は、授業内学修において、学生のコラボレーションを触発するためには、少人数のグループ編成にリーダー格の役割作りに加え、教師、あるいは上級生などが教育的な目的で介入する必要性を示唆している。つまり、教員による教育的介入の頻度や深度も、コラボレーションを促進させる為の重要な要因となるだろう。

## 5. 今後の展望

アクティブラーニングを促すための教育的介入によって、各学生の視点のすりあわせが起き、コラボレーションが促進されることが確認できた。その一方、コラボレーションを促す方法については教育的介入の中で方向性が見えてきたものの、それが学びにどのような貢献をもたらしたのかまでは明らかにされなかった。コラボレーション経験が学生にどのような意味を持ち、そして成長に寄与しているのか、長期的な視点で評価する方法が必要であるだろう。引き続き、教育効果としてコラボレーションを通じたアクティブラーニングの可能性について、内容と方法の検討を深めたい。

### [引用文献]

- 井庭崇(2009)「コラボレーションによる学び」の場づくり ―実践知の言語化による活動と学びの支援― 『人口知能学会誌』 24 巻 1 号 : 70-77.
- 大塚達雄・硯川眞旬・黒木保博(2002)「グループワーク論 ソーシャルワーク実践のために」 ミネルヴァ書房
- 中央教育審議会大学分科会将来構想部会 (2017)「今後の高等教育の将来像の提示に向けた論点整理」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/\\_ic](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/_ic)



sFiles/afieldfile/2018/01/16/1400115\_01.pdf(2018/2/20 アクセス)

Brown,A.(1992).Design Experiments: Theoretical and methodological challenges in creating complex interventions in classroom settings. *The Journal of the Learning Sciences, 2 (2)*, pp.141-178.

(まるやま こうすけ, 札幌大谷大学社会学部地域社会学科助教)

(こまちや けい, 札幌大谷大学芸術学部美術学科講師)

(たかはし はじめ, 札幌大谷大学芸術学部音楽学科教授)

(たかだ ゆりこ, 札幌大谷大学芸術学部音楽学科准教授)